

# 深イ〜話!

No.55

「高校野球最後の夏」——元高校野球部監督 坂口裕一郎

昨年の三月、私は五年を残して、公立高校の社会科の教員を早期退職しました。一度も野球部の指導から外れることなく、充実した三十一年でした。

「巨人の星」の星飛雄馬<sup>ほしひゆうま</sup>に自身を投影し、プロ野球選手を夢見た少年時代。そんな夢も高校三年の夏の県大会で初戦敗退し、涙で終わりました。大学を出て地元の銀行に勤めるも不完全燃焼の思いがあり、教員採用試験を受け、最初に赴任した中学校で野球の指導担当となりました。

毎年、二年生の八月に新チームが始まり、三年生の七月に最後の大会で負け、涙で終わる。その繰り返しでした。シーズン中は土日も試合続き、冬場もトレーニングと休みはわずかです。

一人息子が幼いころは、中学の教員だった妻に「うちは母子家庭や」とよくこぼされたものです。

その息子も小学五年生から野球を始め、中学時代はレギュラー、高校も一年生から試合に出るなど順調でした。



ところが、一年生の校医検診で首に腫瘍<sup>しゅよう</sup>が発見されたのです。精密検査をしても良性か悪性かわからないまま、日に日に病状は悪化します。不安の中で「野球が以前のようににはできなくなる可能性は高いが、何とか腫瘍を切除しましょう」と言ってくれる医師に出会い、すべてを託しました。

幸い二度目の手術で大半の腫瘍が取れました。“生きていてくれてよかった”心底そう思いました。その後、高校野球最後の夏の大会では背番号をもらい、三塁ランナーコーチで出場できるまでに回復したのです。開会式で嬉しそうに行進する姿、ノックで監督にボールを渡す姿、ベンチやコーチャーズボックスで大声を出す姿……。ずっと息子の姿ばかり追ってしまいました。惜しくもチームは三回戦敗退。球場で最後のミーティング、息子も後輩も監督、指導者も涙、涙でした。

入院当時、真っ先に見舞いに来て下さったのが息子の野球部の監督やコーチです。息子を励ます言葉、先輩や仲間の温かい思いが詰まった千羽鶴に、ただ感謝しかありませんでした。

私は常々、生徒に「周りに何かを期待するより、自分が周りに何ができるかを考え、行動しなさい。」と言い続けてきました。息子の病気を通じて、私自身が人様に与えてもらってばかりの人生であることに気づきました。

グラウンドや教室から離れた今、自分が誰かに生かされて、ここまできたことを思います。今年も球児たちの夏がやってきました。夢を追う彼らにこの先、私が学んだ人生の大切なことを、何かの形で伝えていきたいです。